

最近の魚病発生状況について

長崎県総合水産試験場
環境養殖技術開発センター ― 養殖技術科

本県では、ここ数年、マダイイリドウイルス病やクルマエビのPAV等の以前には猛威をふるっていた疾病がほとんどみられなくなりました。また、ブリ類の類結節症やレンサ球菌症についてもそれほど大きな被害は発生していません。これはひとえに養殖業者の皆様の努力の賜物と感じています。

ただ、昨年の夏は例年よりも水温が低く推移した影響からか、トラフグ養殖ではハダムシ症やエラムシ症などの外部寄生虫症の発生が増加しました。

今回は、最近（昨年度）の魚病診断状況に加えて、昨年度に本県では初めて確認された従来と異なるブリの溶血性レンサ球菌症と、近年増加傾向にあるビタミンB1欠乏症についてご紹介します。

最近の魚病診断状況

総合水産試験場への持ち込みは、ブリでは、ノカルジア症（図1A）やミコバクテリア症が多く、ビブリオ病やエラムシ症のほかに、溶血性レンサ球菌症（後述）やビタミンB1欠乏症が確認されました。

他のブリ類では、ヒラマサで持ち込み件数が増加し、住血吸虫症やレンサ球菌症のほか、ビタミンB1欠乏症や低水温障害によると診断される症状が確認されました。また、本県ではそれほど大きな被害は確認されていませんが、近年、ベコ病が西日本各地で問題となっています。

トラフグでは、粘液胞子虫性やせ病（図1B）やヘテロボトリウム症の診断件数が多く、そのほかに白点病（図1C）やカリグス症等が確認されました。カリグス症については、今シーズンから薬浴剤が販売されると聞いていますので、その効果に期待したいと思っています。

近年、本県での養殖生産量が急増しているクロマグロでは、若齢魚の衝突死と住血吸虫症によるへい死が多く発生しています。そのほか、持ち込まれた魚では、溶血性レンサ球菌症や、

ビタミンB1欠乏症によると診断されるへい死も確認されました。

ヒラメは、養殖現場ではエドワジエラ症（図1D）の発生が依然として多いとの情報がありました。また、例年被害が発生するレンサ球菌症（パラウベリス）については持ち込みはありませんでした。これについては、平成二四年度に認可された二種のレンサ球菌に対する混合注射ワクチンによる効果の可能性があります。



図1 最近の魚病

従来と異なるブリの溶血性レンサ球菌症

数年前から他県のブリやカンパチにおいて、ワクチンを接種したにも関わらずレンサ球菌症が発生する事例が報告されていました。各研究機関による調査の結果、その原因菌は従来の溶血性レンサ球菌症の原因菌であるラクトコッカス・ガルビエと同じですが、性状が従来のものと異なるということがわかりました。

本症は、従来型のレンサ球菌症と性状が異なるため、既製のレンサ球菌症用ワクチンを接種しても発生する可能性があります。実際にはワクチン未接種群と比較するとワクチンを接種した群の方が発症率は抑えられる（ある程度効果が見られる）という研究結果があります。

「ワクチンを打ってもレンサ球菌症が出るのならばワクチンを打たない方が出費が少なくなる」と考える方もおられるかもしれませんが、ワクチンを止めると従来型のレンサ球菌症が養殖場で再燃する可能性がありますので、水試としてはお勧めしません。

本疾病が発生した場合には、通常のレンサ球菌症の治療薬で治療が可能です。その際には、菌の薬剤感受性を調べて有効な薬剤を投薬するようにしてください。

昨年度、本県のブリ養殖場でも一件の発生が確認されました。ワクチンを接種したにも関わらず発症するなど、本症が疑われる事例がありましたら、最寄りの水産業普及指導センターか水産試験場養殖技術科までご連絡ください。

近年増加傾向にあるビタミンB1欠乏症

ビタミンB1欠乏症は、養殖用餌料が生餌主体だった一九七〇年代以前に問題となっていた栄養性疾病で、カタクチイワシやサンマ等のチアミナーゼ（ビタミンB1分解酵素）を多く含む魚類を生餌やモイストペレットとして長期間給餌することによって起こります。症状は、ブリでは食欲低下、体色黒化、緩慢遊泳や狂奔遊泳が起こり、外観的には体表や鱗の出血が特徴的で、放置すると大量死につながることがあります。

昨年度はブリ、ヒラマサ、クロマグロ、オニコゼでビタミンB1欠乏症と診断されるへい死事例が発生しました（図2）。

本症は、一昔前は最もピュラーな疾病の一つで、養殖業者の間ではチアミナーゼを多く含む餌の連続給餌はしないというのが常識でした。しかし、近年、魚粉価格の高騰や、生餌として使用していたサバ等の価格高騰により、安価なカタクチイワシ等を給餌する業者が増えてきていると聞きます。それに加え、養殖業者が世代交代して本症のことを知らない人が増えており、それが近年の発生要因の一つと推測されます。



図2 ビタミンB1欠乏症と思われる
クロマグロ1歳魚

おわりに

今回紹介しましたように、養殖業者の皆様は努力によりほとんど発生しなくなった魚病がある反面、依然として毎年発生している魚病や、近年ほとんど発生していなかった魚病の再興に加え、新たな魚病の発生も確認されています。

これらの対応には投薬等が必要な場合がありますが、消費者の安全・安心に対する意識の高まりから、養殖業者の皆様には、これまで以上に水産用医薬品の適正使用に十分留意していただく必要があります。

投薬等が必要と考えられる魚病が発生した時は、適切な対策を取るために、総合水産試験場または最寄りの水産業普及指導センターへご相談ください。

総合水産試験場では、新たな水産用医薬品の開発・承認に向けた取り組みを行うとともに、魚病診断や防除対策等に対する相談を随時受け付けております。相談される際は、窓口である水産試験場養殖技術科（〇九五 八五〇 六三一 一九）へご連絡ください。